

地域情報（県別）

【石川】加賀市に2院目の皮膚科クリニック、レーザー治療に強み-池田智行・加賀いけだ皮膚科院長に聞く◆Vol.1

高校の頃から地元での開業を目指し、2025年5月に実現

2025年8月27日（水）配信 m3.com地域版

「将来は地元に戻り、地域医療に貢献したい」――。2025年5月に開院した「加賀いけだ皮膚科」の池田智行院長は、高校生の頃から実家のある加賀市での開業を目指してきた。同市は石川県の市町で人口が4番目に多いが、数十年前から皮膚科のクリニックは一軒のみ。「皮膚科医になれば、きっと困っている人の役に立てるはず」。池田氏はそんな思いを胸に勤務医として研さんを重ね、この春に目標を実現させた。開業までの歩みを聞いた。（2025年7月16日オンラインインタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



池田智行氏（本人提供）

親族の多くが薬剤師で医療が身近、中学から医師に憧れ

――池田先生は2014年に金沢医科大学医学部を卒業しました。まずは、医師を志した経緯をお聞かせください。

子どもの頃から医療が身近にありました。私の親族は薬業が盛んな富山県出身で、多くが薬剤師です。祖父は置き薬の会社を経営しており、両親も薬剤師でした。次第に医師や弁護士、薬剤師の仕事に興味を持つようになり、中でも自ら診断と治療ができることから、中学生の頃にはとりわけ医師に憧れるようになりました。

――資料によると、医学生の頃から皮膚科医になりたいと思っていたそうですね。

将来的には地元の加賀市で開業したいと高校の頃に思うようになったので、いろいろと想像を膨らませていました。実家が薬局を営んでおり、周辺のクリニックや病院から処方箋が届くので、両親は地域の医療状況に通じていました。家の中でも医療に関する話題が出ていたので、どんな診療科の医師が足りないかも分かるようになって。皮膚科、耳鼻咽喉科、眼科、代謝内科、腎臓内科がそうでした。加賀市の人口は約6万1000人と石川県の市町で4番目に多い一方、皮膚科のクリニックは数十年前から1軒しかありません。「皮膚科医になれば、地域医療に貢献しやすいだろう」と思ったのです。

「想像以上にアグレッシブ」金沢大で皮膚科の可能性知る

——医師になる前から専門とする診療科を決めていたわけですが、実際になってみて、理想と現実のギャップは感じませんでしたか。

良い意味で感じましたね。私は金沢医科大学を卒業後、金沢大学の皮膚科に入局しました。別の大学の医局に入るのは地方ではハードルがありますが、歴史のある金沢大は北陸3県に多くの関連病院を持ちます。石川県立中央病院や富山県立中央病院、福井県立病院に加賀市医療センターなど、規模の大きな病院が名を連ねており、勤務医として経験を積みやすいように思いました。

実際に金沢大の皮膚科に入ると、想像以上にアグレッシブな治療をしていて驚きました。全身麻酔下で手術を行っていたほか、膠原病など専門性の高い病気の治療も行っており、がん患者さんには抗がん剤の治療だけでなく看取りも行っていました。「予想よりも診療の幅が広く、きっとやりがいがあるだろう」と印象が変わりました。

——皮膚科医としての可能性の広さが、「良い意味でのギャップ」だったんですね。

そうです。見た目で多くの病気が判断でき、経過も分かりやすいのが皮膚科の面白いところですが、外科・内科・病理的な要素も含むことに幅広さと奥深さを感じました。外科的な面では、皮膚がんや壊死性筋膜炎などの重い感染症に対して手術を行うことがありますし、筋肉に炎症が起こる膠原病の一種、皮膚筋炎に対しては内科的な視点を持って薬物療法を行います。同じく膠原病の一つで、皮膚や内臓が硬くなる全身性強皮症は間質性肺炎や肺高血圧症などを合併する可能性があるため、これも内科の素養が欠かせません。病理的な面では、水疱症などを切除して顕微鏡で検査を行うこともあります。思った以上にできることが多いと知ったのです。

石川・富山県立中央病院で研さん、大学でレーザー外来も

——その後、先生は金沢大の関連病院である石川県立中央病院や富山県立中央病院に勤務します。

2016年12月から2018年3月まで石川県立中央病院で、2018年4月から2020年3月まで富山県立中央病院に勤めました。石川県立中央病院では一般的な病気をたくさん診ることができたので、開業医としての今に役立っています。大学では専門性の高いがんや膠原病、当時の教授の専門だったアトピー性皮膚炎の治療について学ぶ機会が多く、とても勉強になったのですが、それら以外の疾患を診る機会があまりありませんでした。石川県立中央病院では幅広く診療できたうえ、当時の部長が臨床に強く、県内全域から希少・難治性疾患の患者さんも受診しており学会報告の機会も多くありました。さらに、報告したら全て論文にする組織風土もあり、勉強になりました。

幅広さの一例に、性感染症の診療も挙げられます。近年、若年層を中心に梅毒の患者が急増していますが、これまで診察する機会がなかったという理由で苦手意識を持つ皮膚科医も多い印象です。その点、石川県立中央病院はエイズ北陸ブロック拠点病院であり、北陸および石川県におけるHIV診療の中心的役割を担っています。当時は今ほど症例が多くなかったにも関わらず、HIVと重複感染した梅毒の患者さんを診る機会も多かったため、今では得意分野となっています。開業医としても性感染症の診療を行っていこうと、2024年10月に日本性感染症学会の認定医を取得しました。

——続いて勤務した富山県立中央病院ではどんな印象が残っていますか。

同院での経験も、とても勉強になりました。北陸3県でアグレッシブな治療を行っている病院の代表が、石川県立中央病院と富山県立中央病院です。富山県立中央病院も一般的な病気の患者さんが多く来院される一方、当時の上司の先生方が皮膚外科の手術や重症感染症の治療、皮膚がんへの抗がん剤治療やターミナルケアも行っていました。この2つの病院に勤務したことで、皮膚科医として鍛えられたと思います。

——そして、2020年4月に金沢大学に戻り、レーザー外来を担当します。

金沢大学皮膚科の特徴の一つがレーザー外来を運営していることで、石川県の大学では唯一です。私は2020年4月に大学に戻って同年10月に皮膚科の専門医を取得し、病棟指導医として後輩の育成を図りながら膠原病外来とレーザー外来を担当させていただきました。さらに、2023年から勤めた加賀市医療センターではレーザー外来の開設にも携わりました。当時の経験が、「保険適用のレーザー治療」という当院の特徴につながっています。

◆池田 智行（いけだ・ともゆき）氏

2014年金沢医科大学医学部卒。金沢大学皮膚科に入局し、同大や石川県立中央病院、富山県立中央病院に勤務、加賀市医療センター皮膚科では医長を務める。2025年「加賀いけだ皮膚科」を開院。日本皮膚科学会皮膚科専門医、日本抗加齢医学会専門医、日本性感染症学会認定医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

